

東洋の教えに学ぶ環境システム

Environmental System Based on Oriental Teachings

竹 林 征 三 *
Seizo Takebayashi *

ABSTRACT: In this paper, teachings of Buddhism and Taoism for the environmental system are extracted and treated as very useful solution against today's environment problems.

Environmental problems from the Buddhism point of view can be understood by Goun, or The Five Elements of human beings in Buddhism. Sishouhou, or The Four Principles in Buddhism can apply as The Four Principles of environment.

The wisdoms of Taoism also can teach us how to solve today's complicated environmental problems. The view of the world of Taoism tells us the truth of the view of environment.

KEYWORDS: Taoism, Buddhism, Environmental Problem

1 環境感知システム

1.1 環境は何で感知するのか

環境はあくまでも人間主体 (Anthropcentric) である。その人間が環境を感知する方法は人体の感覚受容器を通じての感覚である。

感覚受容器は生体内外の位置やその性質から — {
・体性感覚 (表面感覚、深部感覚)
・内蔵感覚 (内蔵感覚、臓器感覚)
・特殊感覚 (味覚、嗅覚、聴覚、視覚、前庭感覚)

これらの生体内外からの刺激をうけて即時直接的に引き起こされる意識形成とからなる。

環境学として考える場合、体性感覚の表面感覚は触覚とか体感ということで一要素として考慮しなければならないが、内蔵感覚や体性感覚はよほど特殊な医学的処方をする環境問題以外は無視してよさそうである。又、身体の水平垂直運動及び姿勢を感知する前庭器官による前庭感覚は宇宙飛行等の極めて特殊な環境以外はこれも同様無視してよさそうである。

すなわち、環境学として要素としての感覚 (Sensation) には表面感覚 (触覚や体感)、味覚、嗅覚、聴覚、視覚のいわゆる五感とそれらに第六感ともいうべき心象形成を図る感性を加えての6つの感覚がある。

1.2 仏教観に見る六根・六境・六識の概念

仏教では人間が環境を感知する器官を六根と称している。すなわち六根とは「眼」・「耳」・「鼻」・「舌」・「身」の五器官 (五根) とそれに思考する器官「意」を加えて六つの器官のことである。山を登る時、唱えている「六根清浄、お山は晴天」の六根とはこの六根のことである。

喜びも悲しみも、苦しみも楽しみも、すべて六根による。したがって六根は煩惱のもととなり、迷いや罪惡を起こしやすいので、これを浄めるのが「六根清浄」である。

*Public Works Research Institute, Ministry of Construction, Environment Department

*建設省土木研究所 環境部

「根」が認識する作用の概念が「識」である。すなわち六根で認識する作用が六識である。眼で認識する作用を「眼識」、すなわち「見る」ということであり、耳による認識作用を「耳識」すなわち「声を聞く」ということであり、鼻による認識作用を「鼻識」すなわち「香を嗅ぐ」ということであり、舌による認識作用を「舌識」すなわち「味」ということであり、身体による認識作用が「身識」すなわち身体で感じる「触」ということであり、そしてこの五根、五つの感覚をもとに情報を組みとって意により認識する作用が「意識」すなわち「法を知る」とそれぞれ称している。

次に物事を認識する対象の概念が「境」である。すなわち、この六根で認識する対象が六境である。眼で認識する対象を「色境」という。すなわち眼で認するものはどのような場合でも形あるものであり、形あるものの存在は必ず何らかの色彩を持っているので「色」といつている。耳で認識する対象が「声境」であり、鼻による対象が「香境」、舌による対象が「味境」、身体による対象が「触境」、意により認識する対象が「法境」とそれぞれ称している。反対の見方をすれば環境はそれを認識する器官により六境に分類される。

更に「根」が「境」を「識」する範囲領域の概念が「界」である。すなわち眼で認識する範囲領域を「眼界」といい、意識で認識する範囲領域を「意識界」と称している。

眼界と意識界の間の耳（声）界、鼻（香）界、舌（味）界、身（触）界に当たる4つの界の概念がやや明確にされていない。般若心経によれば「眼界乃至意識界」と記され、「乃至」という言葉で省略されている。

従って六根で認識する範囲領域は六界とはならない。仏教による六界の概念は衆生が自己の行為の結果として生死を繰り返すとされる六つの迷いの世界となってしまう。すなわち六界とは地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上となってしまう六道輪廻の世界観へと飛躍発展する概念となっていく。

更に「十八界」という概念がある。それは眼耳鼻舌身意の六根、色声香味触法の六境、見聞嗅味触知の六識を合せたものをいう。すなわち感知する器官と認識する対象さらには作用という一見全く異なる概念を一括する総括概念へと飛躍する。

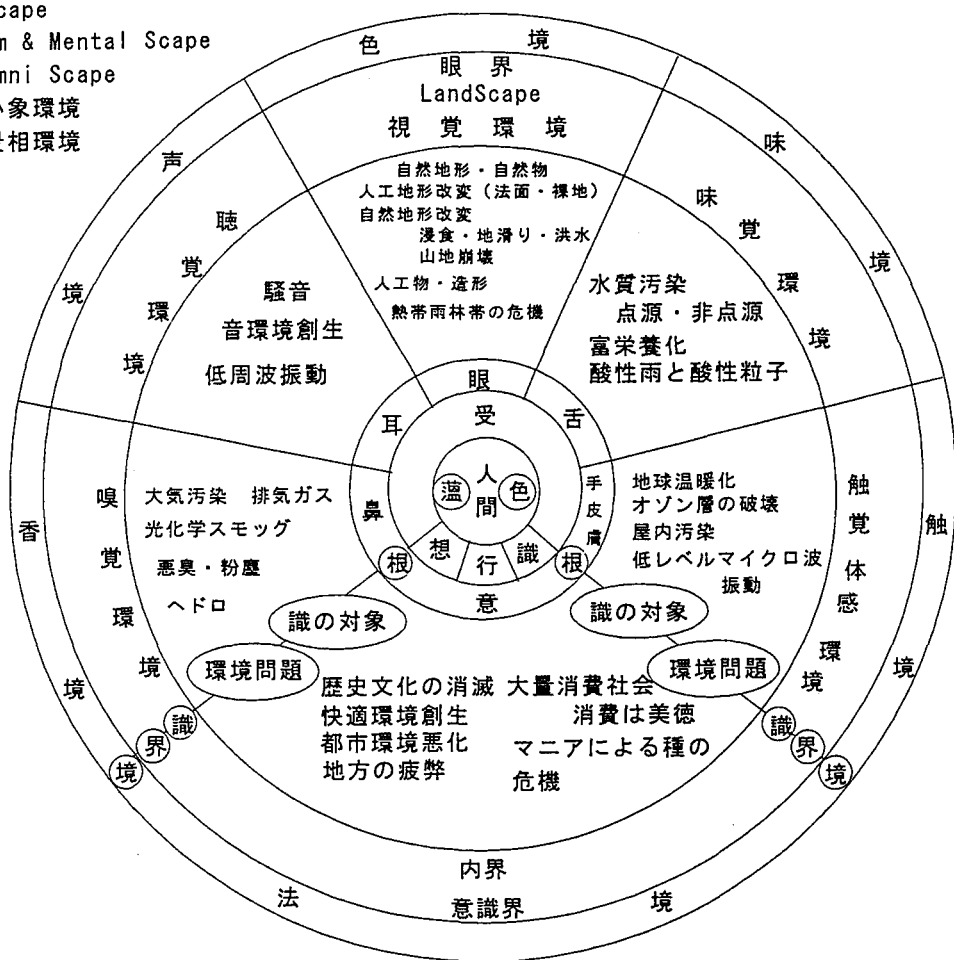
1.3 五蘊思想による環境観

仏教の五蘊思想は仏教観による環境問題のとらえ方そのものである。仏教において煩惱をおこすものとなるものを五蘊と称する。五蘊とは色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊の五つの称であり、蘊とはその集積のことである。色蘊とは仏教では形のあるもの、つまり物質と肉体を意味し、環境問題では環境事象にあたる。受蘊とは仏教では感覚であり五感を意味する。

即ち眼・耳・鼻・舌・身であり、それによる認識する環境がそれぞれ視覚環境、聴覚環境、嗅覚環境、味覚環境それに触覚環境である。想蘊は五感により受した情報より多様な事象を想いめぐらし概念構成する過程であり、行蘊は想像概念構成された事象を識別記憶する認知過程である。識蘊は認知過程を経てきたものごとに心を動かし心象形成作用が加わり意識判断の形成過程を意味する。即ち五蘊とは人間をとりまくすべての存在と精神の要素ということである。従って仏教の五蘊の想行識の世界が六感の環境学という心象環境、景相環境に対応するものとなる。色受想行識の五蘊は全ゆる煩惱のもととなる。六感の環境学にあてはめれば環境問題ということになる。

煩 悩			環境問題
五 蘊	色	物質と肉体	環境事象
	受	感受作用 (五感)	眼→視 視覚環境
			耳→聴 聴覚環境
			鼻→嗅 嗅覚環境
			舌→味 味覚環境
蘊	想	表想作用 (想像)	心象環境
	行	識別・ 記憶作用	景相環境
	識	認識判断の 作用	

Sound Scape
 Plate Scape
 Smell Scape
 Touch & Sensible
 Scape
 Im & Mental Scape
 Omni Scape
 心象環境
 景相環境



五蘊思想と六根・六識・六境の環境システム

1.4 六感の環境システム

環境事象を感知(認識)する六感ごとにそれぞれの環境問題があり、その環境を計るに適したスケールとそれに適した評価方法と対策技術がある。まず、受容器として目、耳、鼻、舌、手及び皮膚の五感と思考の器官を合わせ六感について論じる。

六 根 (受容器)	六 境 (認識の 対象)	六 識 (認識する作用)	〇 界 (認識する領域)	環 境 事 象 (Scape分類)	環 境 問 題 及 び 対 策 技 術
眼	色 境	眼 識 (見)	眼 界	視覚環境 Landscape design Landscape architecture Landscape planning	①自然地形・自然物……風景、風土、景観工学 ②人工地形改変……盛土、切土、埋立、土工技術 法面、裸地……緑化技術 ③自然地形改変……国土防災技術 侵食……護岸、防波堤 地入り、山地崩壊……砂防技術 洪水、侵食……治水技術 ④人工事物・造形……構造物設計、色彩工学（塗装）、 景観設計 ⑤熱帯雨林の危機……焼畑農業の転換、木材資源のリサイクル
耳	声 境	耳 識 (聞)	耳 (声) 界	聴覚環境 Sound scape Sound scape design	①騒音……騒音規制、遮音、吸音等騒音対策 ②音環境創生……擬音、アクティブノイズ、音楽 音色制御のようにサウンド・デザイン ③低周波振動……発生源除去、遮音、吸音・遮音、スライ 等発生源対策技術、防振技術
鼻	香 境	鼻 識 (嗅)	鼻 (香) 界	嗅覚環境 Smell scape Smell scape design	①大気汚染……排気ガス規制 ②光化学スモッグ……オキシダント発生対策、光化学警報 ③悪 臭……悪臭規制、改善命令、下水道整備 ④粉 塵……防塵対策、アスベスト対策 ⑤ヘドロ……汚泥除去、下水道整備 ⑥嗅覚環境創生……芳香生理心理学による快適空間設計
舌	味 境	舌 識 (味)	舌 (味) 界	味覚環境 Palate scape Palate scape design	①水質汚染……排水規制、下水道整備、水質浄化事業 ②富栄養化……排水規制、エアレーション、糸状藻類、 バイオ・レメディエーション ③酸 性 雨と酸性粒子……規制、対策の国際協力
手 及び 皮膚	触 境	身 識 (触)	身 (触) 界	触覚環境 (体感環境) Touch scape Sensible scape	①振動……耐震、免震、制振技術 ②地球温暖化……廃棄物排出規制、省エネルギー対策、省資源 ③オゾン層の破壊……紫外線対策、フロン規制 ④屋内汚染……除湿、加湿、空調技術、 地中からの放射性放出対策 ⑤低周波マイクロ波……低周波マイクロ波対策、発生源除去、 防振技術
意	法 境	意 識 (知)	意 識 界	心象環境 Mental scape In scape In scape design 景相環境 Omni scape Omni scape design	①歴史文化の消滅……歴史文化の評価と保存 ②快適環境創生……感性工学、ネーミングデザイン ③都市環境悪化……都市再開発、地方分散 ④地方の疲弊……地域おこし、活性化、地方分散 ローカルアイデンティティ ⑤多量消費社会……ライフスタイル・マネジメント技術 (消費は美德) 省資源・省エネルギー対策 ⑥マテリアルによる種の危機……環境倫理・環境教育

(1)Landscape

視覚に訴える環境全てが広義のLandscapeであり、広義のLandscapeも更に細分すれば陸域景観を主とする狭義のLandscapeと水辺、水面を主とする水域景観Aquascape、山

Landscape 広義の景観	Landscape	陸域景観（狭義）
	Aquascape	水域景観
	Skyscape	空域景観

際線、空雲を主とする空域景観Skyscape等に分類される。自然地形・自然事物に対しては風景・風土論であり、人工による地形改変に対する法面・裸地対策が緑化技術であり、侵食や山地崩壊等の自然地形改変に対するものが国土防災技術であり、人工事物の造形に対するものが景観設計技術や色彩工学等である。これを計画論として取り扱う環境計画がLandscape Planningであり、その設計論がLandscape designである。やや芸術性を帯びてくるものとしてLandscape architectureがある。

(2)Soundscape

聴覚に訴える環境事象がSound scapeである。“祭りのはやし”を聴けば故郷を想い出し、それを共有する者同士にローカルアイデンティティが形成される。“六甲おろし”のリズムを聴けば阪神ファンの血がおどりと、樹木のざわめき、小鳥のさえずり、せせらぎの音に自然を想う。音に心地良さを感じそれを楽しむのが広義の音楽ということになる。反対に騒音や雑音を聞けば心が落ちつなくなり、不快感を感じる。これらはいずれもSound scapeの例である。不快を取り除き聴覚に心地良いもの即ちバックグラウンドミュージックやテーマソング、キャッチフレーズ、擬音等、更には、音色制御によるサウンド・アメニティー空間の創生を考えるのがSound scape planningであり、それを設計するのがSound scape designである。

(3)Smell scape

豚小屋の臭いには不快感を覚え、森林浴に行けばストレスと関連するホルモンであるコルチゾールが低く抑えられる。バレイアンやラベンダーの香りには鎮静効果が、ジャスミンには興奮効果が認められている。芳香生理心理学Aromachologyの研究を生かしオフィスやインテリジェントビルの快適空間設計がなされる時代になってきた。これらのものの他、アオコや赤潮等の臭気除去等を計画とするのがSmellscape planningであり、それを設計するのがSmellscape designである。

(4)Palate scape

昨今、おいしい水の研究が課題となったり、ミネラルウォーターの商品化が一般化したてきた。かつて水質の良さを誇った我が国の水道も残念なことではあるが、ある意味で外国人が飲めない世界の先進諸都市の水道並みに徐々になってきつつあるようである。

建設行政に係わる環境問題としては“おいしい水”“美しい湖沼”は最大の研究課題の一つということでもある。富栄養化対策技術として藻類には藻類でということである。糸状藻類による対策やバイオ・レメディエーション技術による研究が脚光を浴びつつある。又、世界的な酸性雨の現象にいかに対応するかということも地球規模の環境問題として益々重要な課題となってきた。これらを環境問題を計画論として取り扱うのがPalate scape planningであり、どう現実に設計するかがPalate scape designである。

(5)Touch and Sensible scape

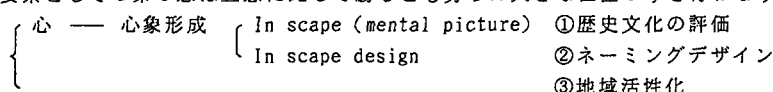
人間にとっての快適環境の最大の要素は温度等の温熱環境であり、降雨等の湿度環境であろう。地球温暖化が地球環境問題の最大課題の一つである現在、これらの体感として受けとめられる気候現象の変化をどのようにとらえ、CO₂やNO_xの排出規制や省エネルギー・省資源問題をどのように計画として位置づけるかということも広義のTouch & Sensible scape planningであり、それをどのように現実なものに移すかがTouch & Sensible designでもある。

(6)Mental scape

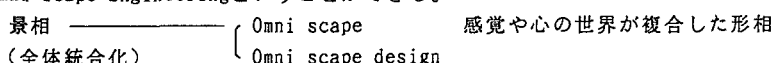
前述の五感で受信した感覚量を心で心象形成する。すなわち、物理的刺激(stimuli)として光、音波等が人間の5つの受容器に達すると、視覚・聴覚等5感の機構を通じて、人間系の反応は「感覚(sensation)」として、一つ一つの光、音波等が大きさ、高さ、長さ等の物理量として分別され、ついで、いくつかの光や

音波が組み合わせられ「知覚（perception）」として感覚量が伝達される。これらが心で光信号、音信号として意味あるものすなわち、「形」や「ことば」等として「認知（recognition）」され、最後に、喜怒哀楽の反応が、「情緒（emotion）」の形で形成される。この認知・情緒の形成過程は主観的なものでいわゆる心による心象の形成過程である。あるものに対しては好ましいと思うし、又あるものに対しては不快に思う。唯一のもの、日本一のもの、最古のもの等に対しては個人個人の先行経験の量と質の相違にもよるが歴史的に由緒あるもの、文化的な独自性の強いものには言い尽くせない大きな心の支え心象が形成されるものである。地域おこしは今や全国3千余の市町村にとっては大変な課題である。地域おこしをどのように計画設計するか、これらがMental scape planningであり、Mental scape designでもある。

環境要素としての第6感とは五感に比して勝るとも劣らぬ大きな位置づけを行わなければならない。



五感と第6感という形で環境を受容するのではなくTotalとして、全体の感覚や心の世界として複合した形相で考えて見ようとするものが景相Omni scapeである。昨今、感性工学が注目されてきている。感性工学はOmni scape Engineeringということができる。



2 東洋の教えに学ぶ環境システム

2.1 お釈迦様の説法に学ぶ環境システム

お釈迦様の説く真理は四つあるという。四つの真理とは、苦集滅道の四諦（四聖諦）がそれである。

苦諦とは、人生とは本質的に苦であるとする苦に関する真理のことである。この人間世界は苦しみに満ちている。生も苦しみであり、老いも病も死も苦しみである。怨みあるものと会わなければならないことも、愛するものと別れなければならないことも、また求めて得られないことも苦しみである。まことに執着を離れない人生は全て苦しみである。これを苦しみの真理（苦諦）という。

集諦とは、苦の原因は煩惱であるとする原因に関する真理のことである。この人生の苦しみが、どうして起こるのかというと、それは人間の心につきまとう煩惱から起こることは疑いない。その煩惱をつきつめれば生まれつきそなわっている激しい欲望に根ざしていることがわかる。このような欲望は生に対する激しい執着をもととしていて、見るもの聞くものを欲しがら欲望となる。また転じて、死をさえ願うようになる。これを苦しみの原因（集諦）という。

滅諦とは、苦からの解放は原因である煩惱の消滅であるとする苦を滅した悟りに関する真理である。この煩惱の根本を残らずなく滅ぼし尽くし、すべての執着を離れば人間の苦しみもなくなる。これを苦しみを滅ぼす真理（滅諦）という。

道諦とは、いかにすれば煩惱が取り除けるかとする悟りに至る修業方法実践に関する真理である。この苦しみを滅ぼし尽くした境地に入るには、八つの正しい道（八正道）を修めなければならない。八つの正しい道というのは、正しい見解（正見）、正しい思い（正思惟）、正しい言葉（正語）、正しい行い（正業）、正しい生活（正命）、正しい努力（正精神）、正しい記憶（正念）、正しい心の統一（正定）である。これら八つは欲望を滅ぼすための正しい道の真理を（道諦）といわれる。これらの真理は人はしっかり身につけなければならない。というのはこの世の中は苦しみに満ちていて、この苦しみから逃れようとするものは誰でも煩惱を断ち切らねばならないからである。煩惱と苦しみのなくなった境地は、悟りによってのみ到達し得る。悟りはこの八つの正しい道によってのみ達し得られる。

この苦集滅道の四諦の人間生存に関する真理は、環境事象に関する真理そのものでもある。苦諦とは環境

事象に関する真理のことであり、環境事象とは本質的にそれぞれ独立ではなく、常に他のものと互いに複雑に影響し合っているとする真理のことである。

生物は外界としての自然からの環境作用に対し、適応を行って生存し続ける一方、環境を自らの生活に適するよう改変して生活している。環境事象とは作用（環境作用）と反作用（環境形成作用）の関係にあるという真理と、自然環境のあらゆる現象は、大気循環、水循環、大地循環、食物連鎖等の循環のプロセスの一要素であるという真理がある。この環境事象に対する2つの真理が苦諦にあたる。

集諦とは環境問題の発生の原因は、作用と反作用のバランスがくずれることにあるとする原因に関する真理にあたる。人生の煩惱が苦の原因にあたるように、環境問題の原因は、環境作用と環境反作用とのバランスがくずれることにあるとするものである。

滅諦とは環境問題の原因がなくなり、良好な環境場が、維持されるには、環境容量内での生存と活動であるとする真理のことである。「悟り」にあたるものが、「環境容量内での生存と活動」及び「自然との共生」ということである。

道諦とは環境問題解決に至る行動規範に関する真理ということになる。

真理の内容		人類の生存と生活	環境事象
四諦	苦諦	人生の本質 「苦」 「縁起の理」	環境事象の本質 「作用・反作用等の相互関係」 「循環」
	集諦	苦の原因 「煩惱」	環境問題生起の原因 「作用・反作用の均衡が潰れること」
	滅諦	苦の消滅 「悟り」	環境問題の解決 「環境容量内での生存と活動」 「自然との共生」
	道諦	悟りに至る修行法 「八正道」	環境問題の解決に至る実践法 「八正道」

環境問題解決に至る、八つの実践行動規範を考えて見る。

まず正見とは正しい自然観、環境観ということである。キリストの教えでは森羅万象、全てが全知全能の神により創造されたという。このようなキリスト教の自然観と仏教や老子の自然観とでは環境事象の本質のとらえ方が根本から異なってくる。すなわち、正しい環境観とは神の存在観や生物観そのものであり、宗教観そのものということになる。

正思惟とは正しい環境事象に対する思索である。すなわち論理展開・環境学の体系化構築ということである。感情的・ムード的な環境保護論の展開では、環境問題の本質的な解決策からはそれていくことが、懸念される。次に、環境学の構築にあたっては、まず用語の概念を正確にすることが前提となる。正語とは用語の概念を正確に定義することを意味する。環境に関わる各種用語の概念が人々によってズレておれば論理展開はかみあわず環境問題解決には至らない。環境問題解決にあたっての正しい行為・正業とは環境破壊につながる行為は行われないということである。すなわち、人為による最大の環境破壊である戦争や大量汚染物質の投棄、種の絶滅への行為、貴重種の採取等への戒めである。環境破壊につながる行為である悪業に対する正業は、今日的表現では「自然の恵みに感謝」ということになる。

次の、環境問題解決にあたっての正しい生活・正命とは、少消費、リサイクルを旨とする、いわゆる「エコロジカルライフ」の概念である。

次の環境問題解決にあたっての正しい努力・正精進とは環境保全に対する正しい目標設定ということである。環境問題解決への道は非常に複雑錯綜し、互いに関連し合った系に対する長い長い道程である。地球規模の環境問題解決への道は道程が長いだけで中間における目標設定が重要な課題となる。アジェンダ21、フロン絶滅、CO₂削減目標等の事例を挙げるまでもなく目標設定はますますその重要性を増してきている。

環境問題解決への正しい注意力・正念とは、環境問題に対する正しい情報の蓄積ということになる。環境

問題に対する正しい評価と状況把握は、環境事象毎にそれに対する適切な観測値の集積にかかっているといっても過言ではない。情報過多な現在、環境事象毎にそれに適した時間スケール、空間スケールの評価尺で測定された正確な数値情報の集積は正しい環境判断の前提条件である。環境問題解決への正しい精神統一と多くの人々・組織・国々等々各レベルでの共同体が同じ目標設定に対し共同で取り組むということである。

お釈迦様は以上八つの道で私どもは煩惱を克服し、その法策として苦を克服することが出来るということを現在の私どもに教えてくれている。

次節で仏教の四摂法の心は環境四則に通じることを述べるが、これはお釈迦様の「四聖諦」「八正道」の教えを別の形で表現したものであり、その底に流れる心は全く同じものと見ることができる。

これは、お釈迦様は相手の理解力の程度や素質素養の差に応じ、臨機応変に説法の内容を表現法を変えて説いたものである。この説法のやり方を「応病与薬」とか「対機説法」と称している。

八 正 道

	煩惱の克服・悟りに至る修行徳目	環境問題解決に至る実践
正 見	正しいものの見方	正しい環境観
正思惟	正しい思索	正しい環境事象に対する論理展開 (環境学)
正 語	正しい言葉	正確な用語の概念
正 業	正しい行為	自然の恵みに感謝
正 命	正しい生活	少消費・リサイクル エコロジカルライフ
正精進	正しい努力	正しい目標の設定
正 念	正しい注意力	正しい情報の蓄積
正 定	正しい精神統一	共同取り組み (国際協力)

(2) 環境四則に通ずる仏教四摂法の心

仏教の教えのなかに人が正命（正しい生活をする）する法として四摂法の説法がある。すなわち、四摂法とは人として生きながらえとともに正しく価値体として生き続けるための方法のことであり、具体的には布施法・愛語法・利行法・同事法の四法である。摂とは、おさめるという意で、一つの法を行えば、自ずから他の三つの法も包括されるとするものである。四摂法の意は文字面から平易な表現でいえば、

- ・布施とは人に物を施し与えることを意味する。
- ・愛語とは人に思いやりの言葉、慈悲のこもった言葉で対応することを意味する。
- ・利行とは利巧な行い、すなわち相手の身になって見ることを意味する。
- ・同事とは形をかえて人と同じ仕事にいそむということを意味する。

この四摂法の教えは言葉面以上に奥深い意義を秘めている。このお釈迦さまの教えは現在の地球環境問題への人のとらねばならない道、環境四則そのものでもある。

布施とは、人に施し与える物や行為という表面的な意の奥に真理がある。布とは、地に広くあまねくしみとおることであり、施とは、いわゆる福祉的な意で施すという行為の奥の真理は感謝のこころである。布施とは、感謝のこころで、社会に返礼していく行為なのである。すなわち、環境問題にあてはめれば、人間が自然環境に対する第一はまず、自然からの限りない恵みに対し素直に感謝の意を表すことであろう。

愛語とは、ある思いをこめての I Love You というような表面的なことでは当然なく、愛心に根ざす慈心の種子すなわち言葉である。人と人との良い関係を保ちつつ生きるためには、その媒体として慈心を伝える口（ことば）の役割が欠かせない。それが愛語なのである。愛語とは人と人との共生の法を意味する。環境問題の対応としての人と自然との共生のコンセプトに対応すると見ることができる。

利行とは、利巧な行いとは相手の身になって見る、人のためになることをするということであり、人のためにすることが必ず自分のためにもなるということで循環の真理を説いている。環境問題解決に向けては環境事象の循環を知り、多量消費、多量廃棄からリサイクル型生活・省資源省エネルギー型生活への転向を説いていると見ることができる。すなわち、これまでの自己の快適生活のための多量消費、多量廃棄の自己中心エゴロジカルライフから脱し、循環エコロジカルライフへの意義を説いていると見ることができる。

同事とは、自分の中に他者を見、他者の中に自分を見るという行為で、形をかえて同じ目的を持つ（人と同じ仕事にいそしむ）という意になる。環境問題にあてはめれば、現在の地球環境問題の解決の一大キーコンセプトである参加と国際的取り組みと見ることができる。地球環境問題の解決策は一人一人が、一組織が一組織ごとに、一国が一国ごとに、" Think Groval Act Now "、" Think Groval Act Locally " の本義のもとに、国際的な取り組みに参加するということである。四摂法の同事の説法そのものと見るすることができる。仏教の四摂法は環境問題に対し、環境四則と対比できる。

地球環境問題の解決に向けて的確に対応するため、1993年11月環境基本法が制定され、それを踏まえて人間と環境との間の望ましい関係を築くための総合的な施策目標として、1994年12月16日に環境基本計画がとりまとめられ閣議決定された。実に素晴らしいことである。環境基本計画の長期的な目標のコンセプトが「循環」、「共生」、「参加」、及び「国際的取り組み」である。これらのキーコンセプトに「自然の恵みに感謝」を付け加えたコンセプトがお釈迦様が迷える人の世を救うために説いてきた四摂法そのものなのです。お釈迦様の四摂法は環境四則に通じる。

(仏教) 四摂法	(環境) 環境四則
布 施	自然の恵みに 感謝
愛 語	共 生
利 行	エコロジカル ライフ・循環
同 事	参 加 国際的取り組み

2.3 老子に学ぶ環境観

東洋の環境思想で仏教と共に大きな影響を与えてきた思想として老子・荘子による老荘の思想がある。老子は厳しい現実の乱世をどうしぶとく生き抜くか、端倪すべからざる処世の知恵を説いている。そのために展開した知恵が老子のいう「道」と「徳」である。「道」とは森羅万象の根源に存在する「普遍的な実体・実相」と森羅万象の運動を支配する「根本的な原理」であって、その道を認識し、体得することによって身につけた社会・人生の処世法が「徳」であると老子は考えた。この老子の現実をどのように見て、どのように生きるかとする英知は、現在の錯綜した環境問題をどのようにとらえ、どのように対処していけば良いかを教えてくれていると見るすることができる。

言い方をかえると、「道」は老子の世界観であり、それは自ずから老子の自然観、環境観にも合い通ずるものである。又、老子は万物の根源に存在する「普遍的な実体・実相」は玄妙なもので相対的な存在であるとした。すなわち、美と醜、善と悪、有と無、難と易、長と短、高と低、音と声、前と後、等々、全ては相対的な区別にすぎず、互に関連し合い互いに転化し合うものであるとした。又、万物の運動を支配する「根本的な原理」は衆妙であり、2つの原理がある。

一つは老子（第25条）に「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」と説いている。すなわち「循環」の思想である。もう一つは老子（第40条）に「反は動の道なり、天下の物は有より生じ、有は無より生ずる」と説いている。すなわち「作用と反作用」の思想である。作用・反作用は環境問題においては、環境作用と環境形成作用ということにあたる。老子のこの世界観は、実に現在の環境観の真髄をついたものであると言える。老子の説く社会・人生処世法、徳の思想はそのまま現在の環境問題に対する処法と考えることができる。

徳の第1番目は「清静じやうじん恬淡」と「無為自然」である。清静とは老子（第45条）に「清静にして似って天下の正たるべし」と説かれている。清静とは治道の哲学であり、為政者の意によらず民の静々しゅくしゅくと自

ずからの活力により栄え治まっている状態を意味し、恬淡とは心やすらかで無心な状態である。又、「無為自然」とは老子（第43条）に「無為の益は天下能くこれに及ぶこと希なり」又、老子（第48条）に「無為なければ則ち為さざるなし」と説かれている。すなわち、人の意がなく自ずからなる状態をいう。既ち、この「清静恬淡」「無為自然」の処世法の心は対環境処法では「自然の尊重」「自然保護」の心にあたる。

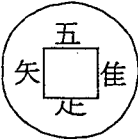
徳の第2番目は「柔弱謙下」である。柔弱とは老子（第40条）に「弱は道の用なり」と説かれている。又謙下とは老子（第61条）に「大なる者はよろしく下となるべし」と説かれている。

即ち「質朴」「控え目」の精神を意味し、即ち、この「柔弱謙下」の処世法の心は対環境処法では強力・急激な人為ではなく、どうしても人為を施す時には、できるだけ弱めにやさしく、ゆっくりとの精神で、その内実は、環境容量以内での持続的開発と利用ということになる。

徳の第3番目は「吾唯知足」・「知足恒足」である。吾唯知足は京都等禅寺の手洗いはちに核された模様としてなじみの言葉である。「知足」とは老子（第33条）に「足ることを知るものは富なり」又、老子（第46条）に「足ることを知るものは恒に足れり」と説かれている。即ち「知足」とは欲望のない状態・無欲をいう。この世の中で全ゆる悪事は欲望に起因するもので、その欲望は足ることを知らぬ心がその根本にあるからである。この世の全ゆる環境問題は人々の足ることを知らぬ多消費、多廃棄のエゴライフから生じていると言っても過言ではないかも知れない。知足の精神は環境問題に対する省資源省エネルギー、少消費、低負荷、そしてリサイクルのエコライフの精神を説いているのである。

徳の第4番目は「和光同塵」である。和光同塵とは老子（第56条）に「その光を和らげ、その塵を同じうし」と説かれている。和光同塵とはおのれの才能や知識をきれいさっぱり流し去って世俗と心より同調することを意味している。人と人とか対立を解消し共生するということはこの和光同塵の精神である。

現在の環境問題の最大のキーコンセプト、共生の思想は老子の処世法の一つでもある。



老子の環境観

道	世界観	玄妙	万物の根源に存在する「普遍的な実体・実相」	道理は玄妙で相対的な存在	
		衆妙	万物の運動を支配する「根本的な原理」	道理は玄妙で循環作用・反作用	
徳	社会・人生処世法	清静 せいじやうたん 恬淡 てんだん （無心） 無為自然		対環境処法	自然尊重 自然保護
		柔弱謙下（質朴控目）			持続的開発・利用 （環境容量内）
		吾唯知足（無欲） 知足恒足			少消費・低負荷 省資源・省エネルギー
		和光同塵			共生